



のぞみ整骨院グループ

(有限会社こじま)

伊勢田院 住所：〒611-0043 京都府宇治市伊勢田町中山 24-27

電話：0774-41-3400

大久保院 住所：〒611-0033 京都府宇治市大久保町旦椋 9-19

電話：0774-39-4154

WEB：https://nozomi33.com/

YELL

Vol. 32

地域に根差し35年 住民の「のぞみ」を叶える

縁ある方々の『のぞみ』を叶える会社・社会を実現する。その理念を掲げ、京都府宇治市で活動を続ける鍼灸整骨院があります。「のぞみグループ」(有限会社こじま、本部・京都市宇治市、小嶋道範代表)。2025年10月には創業35周年を迎え、「患者様や自社社員・スタッフの『のぞみ』を実現し、社会に貢献していく」と、思いを新たにしました。

1990(平成2)年、創業者の小嶋章子会長が、絶対絶命の人生の困難に直面しながらも、自分を含めた人間に秘められた力を心から信じて行動し、自分や息子(道範代表、患者様の人生をも輝かせ、地域社会に貢献すること)で切り拓いていくこととする決意が原点でした。

その志が、道範代表へ、そして社員・スタッフ、患者様へと共有されて35年。治療院は、鍼灸整骨院の「のぞみ鍼灸整骨院伊勢田院」「同・大久保院」をはじめ、往診治療院の「のぞみ訪問マッサージ治療院」と、患者様や地域のニーズに応えることを第一に拡大してきました。

「本日は改めて、私たちが地域で働く意味を深く見つめ直す時間となりました。私たちはどう関われば、その方にとっての『幸せ』につながるのか。その答えを追い求め続けることこそ、私たちの使命であり、存在意義であると強く感じました。これまで通り、人と人との支え合いや一期一会を大切に、丁寧な感謝の気持ちを持って、患者様や社員の『のぞみ』を叶えていくためにまい進します」。2025年10月5日、「のぞみグループ」創業35周年記念講演会で道範代表は出席した人々を前に、決意を語りました。

章子会長、道範代表をはじめ、社員・スタッフが多岐にわたる困難に直面しても一つ一つの困難から決して逃げず、迷って立ち止まっても、問い直して前へ進み続けた35年でした。そうして乗り越えた先で湧き上がってきたのは、たくさんの人への言葉に尽くせぬ感謝の想い。創業者の章子会長、後継の道範代表が生き抜いた現実と、そこから生まれた「結晶」としての企業理念の根源をたどりながら、さらに新たな景色を目指そうとする「のぞみグループ」の姿を追い求めました。



伊勢田院 外観



大久保院 外観



京都府

宇治市

「出会い」が待っていた

1990(平成2)年9月11日、京都府宇治市の一角に、自宅併設の小さな治療院が産声を上げました。それは「こじま治療院」(当時)で、施術者は創業者の小嶋章子・現会長(以下、章子会長)ただ一人でしたが、その傍らには、高校生の息子・道範さん(以下、道範代表)が居ました。

章子会長が息子と共に生き抜こうと決意し、同時に患者様を幸せにする治療家としての人生に希望を感じて迎えたこの日。その笑顔の裏に、人生における絶体絶命の困難を乗り越えてきたという喜びと自信と言葉にできない感慨があつたことを、いったいどれぐらいの人々が知っていたでしょうか。「人生は努力すれば報われる」。そんな言葉が簡単には通用しない現実の中で、章子会長は生き抜いてきました。

嫁ぎ先が寺だった章子会長。結婚後は寺のそばの自宅で夫、道範代表と暮らし、明治生まれの父と母(道範代表の祖父母)も同様に寺の近くに住むという環境でした。道範代表は「物心ついた時から『お前は寺を継ぐのだ』と言われて育ちました。特に母からは、『お前は人の役に立つために生まれてきたのだから、常にそういうつもりで物事を考えなさい』と厳しく言われていました」と回想します。

道範代表の祖父母や母が厳格であつた一方、家庭内は落ち着かない状態が続きました。そのようなこともあって、道範代表にとって祖父母の家に行くことは息抜きでもあり、楽しくもありました。

1983(昭和58)年12月3日、道範代表が小学校3年の時、祖父が亡くなります。道範代表は葬式に参列した多くの僧侶の姿を見、それだ

けでなく参列者が名だたる人々であつたことから、祖父はかつて宇治市の市長選に出たり、社会活動に積極的に貢献していた人であつたことを知りました。「社会の為に尽くす」。その思いや行動は、祖父もルーツの一つであり、母・章子会長、そして道範代表へ。人の役に立つために生まれてきた。その言葉と共に、知らず知らずのうちに受け継がれていたのかもしれない。

ところがこの祖父の死が二人に大変な苦境を与えます。道範代表は小学校4年生の時、宇治市へ移り、小学校も転校しました。章子会長はのちに離婚しますが、それに伴う経済的困難に直面しました。それでも、我が子と二人、とにかく生きるために、さまざまに仕事に就き、働き詰めの毎日を送りました。当時はまだまだ社会で働く女性が少なく、また給料も安いなどの差別もありました。月11万円という低賃金な仕事の上に長時間労働。さらには上司や同僚によるハラメントは日常茶飯事。自分の心身を保つために、少しでも条件の良い仕事が見つければ転職しました。それでも章子会長は、諦めたり、適当にやり過ぎたりするのではなく、自らその道を切り拓き、前に進んでいく強さと勇気を手放すことはしませんでした。「このままでは終われない」。

そんなある日、章子会長に「運命の出会い」が訪れます。それは宇治市のJR新田駅近くの鍼灸院での仕事との出会いです。三療(鍼・灸・あん摩マッサージ指圧師)の国家資格が得られれば、毎月安定的な生活費が得られます。それだけではありません。体の不調を訴えて来られた患者様を治して感謝され、患者様もそして自分自身も生命の喜びを実感しながら地域や社会に貢献できる。「こんな素晴らしい道があるんだ!この道へ進んでいこう」と決意したので



幼少期の道範代表と祖母



章子会長、幼少期の道範代表と祖母

中学生時代の道範代表と祖母



章子会長 鍼灸理療専門学校へ入学

道範代表が中学に入学した年、章子会長はあん摩マッサージ指圧師、鍼師、灸師の資格が取得できる「京都仏眼(ぶつげん)鍼灸理療専門学校」(京都府下京区、当時は「仏眼厚生学校」)へ入学します。そこから、さらに必死の生活が続きました。朝から夕方まで臨床と専門学校の授業、夜は接骨院でのアルバイト。家に帰った後も深夜まで勉強を続けます。目指した道へ。子どもを食へさせるために、自分を信じて、かじりつくように邁進する日々でした。

専門学校で学ぶ学生たちはみな意識が高く、社会経験を積んだ年齢の人も多くあったため、「卒業して資格を取ったら開業したい」という夢に燃えていました。そうした意欲的な学生たちの中で、章子会長も自分を奮い立たせました。

人並み外れた強い想いは、「息子もより良い人生が送れるようにしたい」という願いとして現れます。道範代表には常に「勉強をせなさい。勉強して進歩し、自分の人生の選択を増やさない」。経済的に苦しくても塾に通わせ、中学受験にも挑戦させました。一方で道範代表はそれまでの不安定な生活環境や、その気持ちを重く感じて、勉強習慣もつかず、中学受験の意味も見いだせないうまま、結局、受験は失敗してしまっています。

それでも、章子会長は自らが努力して取り組み、その背中で、息子に自分の生き様を見せてくれました。道範代表も母の人並み外れた厳格さや辛抱強さ、底力が、のちに創業者として卓越



創業時のこじま治療院

した能力を發揮したという事実を直視し、感謝と尊敬を抱くことになるのですが…。

さて、家では道範代表の祖母が家事全般をこなし、いろいろと面倒を見てくれました。元教師の祖母は年金を受けており、その年金が一家の経済的な支えになりました。「おばあちゃん支えなければ専門学校へ通うことなどできなかつた」と章子会長は感謝を語ります。一人の力では乗り越えられない困難も、みんなの手を携えていけば、越えられそうになかった苦境も乗り越えられる。その可能性をひたすらに信じて、三人が一束の矢のようになって向かっていったのです。

ついに自宅併設の 治療院を開業

1990（平成2）年9月11日、道範代表が高校に入学した年の秋、ついに章子会長は宇治市伊勢田にある自宅に併設する形で「こじま治療院」（現・のぞみ訪問マツサージ治療院）を開院しました。地域にチラシを配布すると話題になり、患者様が治療に訪れてくれるようになりました。日に日に多忙になり、朝7時から夜10時半まで、休みなく患者様に向き合う日々が続きました。章子会長に頼まれ、道範代表が患者様の対応をすることもありました。患者様の中にも、母子が二人三脚で対応している様子を見て、高価な健康補助食を差し入れてくれたり、人生訓を語りつつアドバイスをくれる人も現れ、お互いがお互いを支え合い、必要としていく関係性が生まれてきました。

ますます忙しくなり、人手不足のために外部のスタッフを雇い入れました。ところが起業直後でもあり、まだまだマネジメントの概念が不足していたこともあって、退職してしまうスタッフもいました。しかし、暗闇があれば光があるもの。二人が懸命に取り組む姿に共感し、患者様のために温かな施術をするスタッフもいました。

治療院では、院内での施術だけでなく、通院できなくなった患者様のための往診もしています。ご自宅に伺うようになると、生活の様子、住まいの環境を見る機会が増え、患者様から相談を受けたり頼まれたりすることも増えました。買い物ができなくなった、家のドアが壊れてしまった、電球が切れたが交換できない。そうした悩みも含めて、一人ひとりに丁寧な心を込めて接するスタッフ。仕事が終わった

創業時のメンバー



後、患者様の様子を伺いに寄ってみたというスタッフ。そうした出来事が患者様との会話からこぼれてきて、章子会長と道範代表は患者様のための施術とは何かということを常に考え、そして尊敬できるスタッフがいてくれることに感謝したのでした。施術の後、患者様がみるみる元気になり、また悩み事が解決すればその表情は喜びの笑顔で笑顔であふれ、輝いていました。治療院の仕事とは、単なるやりがいや見返りというようなものはるかに超えて、まさに生きがいを実感する日々でした。

そして章子会長はある確信を抱きます。「治療とは、単に身体を治すこと、単なるビジネスではない。患者様やスタッフ・社員の『のぞみ』や人生に寄り添うこと。『今、その人が一番困っていることは何か』を常に考えて、一人ひとりの『のぞみ』を叶えていきたい」。この姿勢こそが、のちに「のぞみグループ」の重要な理念となっていくのです。



高校時代の道範代表と祖母

道範代表 治療家としての挫折と再起

道範代表は、母の仕事を手伝いながら、高校2年になっても進路は定まっていませんでした。そんな時、担任教師と母、自分との三者面談をきっかけに、母と同じ道を歩むことを決意しました。

当時、三療のほか、柔道整復師の資格も取れる専門学校は全国で13校しかなく、競争倍率も非常に高かったものの、大阪にある専門学校に2度挑戦して合格。高額な授業料も宇治市の補助金を受けて学びました。母の仕事を手伝いながら、治療家への道を目指して歩き出した道範代表に、再びの転機が訪れます。



初期メンバー



初めて入社した3名のスタッフ

温かなスタッフ 患者様との出会い

道範代表は、大阪の柔道整復師の学校と、京都の三療の専門学校を卒業したのち、岐阜で整骨院の立ち上げに携わりました。整骨院は開業したばかりにも関わらず、「一人ひとり丁寧な診てくれる」と評判になり、朝9時から10時まで休憩時間もないほど患者様が殺到しました。激務が続いた影響で、中学時代から痛めていた腰の坐骨神経痛が悪化。薬を飲みながらだましましたし仕事をしてきたものの、ついに過労も加わって入院。半年間も引きこもってしまいました。

そんな道範代表を救ったのは親友であり、母・章子会長であり、そして何より患者様でした。親友は飲み連れ出してくれ、思いのたけを聞いてくれました。

そして章子会長は引きこもる息子を見かねて、「訪問治療の患者様の初回訪問だけでも行ってほしい」と頼んできました。その男性患者様は初対面から「お前はできる。すごい」と褒め、激励してくれました。その後も会うたびに「すごい。間違いなく大物になる」と繰り返します。道範代表の頭の中に「そうはいっても自分はダメだ」というようなネガティブな思いが何度浮かんでも、男性患者様が「できる」「すごい」と繰り返し励まし続けてくれたおかげで、次第に訪問治療の現場でこの患者様に会うのが楽しくなってきました。そして感謝され、笑顔を見る回数も増え、再び「人に必要とされる実感」を取り戻したのです。

道範代表は言います。「この患者様のおかげで訪問治療の楽しさを再実感し、知らず知らずの間に、それが私自身の心のリハビリになっていたのです。それから往診の仕事に復帰し、

どんどん外へ出られるようになっていきました。患者様を癒し治す治療家が、逆に患者様に癒され心のリハビリを受けている。それを実感する出来事でした。

またもう一人、大切な高齢男性の患者様との出会いもありました。その患者様はこじま治療院の開院当初から通ってくださっていたいながら、ある時期から通って来られなくなりました。その後、道範代表が訪問治療でご自宅に伺うことに。その機会に治療院に通わなくなった理由を聞くと「忙しくしているようだったから遠慮した」と。当時は1人で1日12、3件は訪問治療をし、疲労困憊の毎日。その患者様のご自宅での施術も、時計を気にしながらのこともありました。ところが、その患者様は転倒・骨折で入院し、その後、亡くなってしまいました。

古くから知っている患者様との突然の別れ。弔問に訪れた道範代表に、「ご遺族や親戚の方々のみな、感謝の言葉を口々に述べました。そこで道範代表は愕然とします。「いい加減な気持ちで終わりの時間を気にしながら施術していた自分がいた。そんなふうに感謝されるような自分ではなかった」。自分のあり方を恥ずかしく思い、そして激しい後悔の念が押し寄せました。患者様との出会いは一期一会なのに……。いくら後悔しても、もう取り戻すことはできないことを痛感しました。

また、20歳の時にはたびたび往診していた寺の住職との別れがありました。いつも優しく、本當の孫のように接してくれました。往診で伺った日、住職の顔が真っ白で表情は動いていても脈が取れません。近くにあるホームドクターを呼びましたが医師に治療を問われたご家族が「このまま楽に逝かせてあげてください」と言い、そのままお別れとなりました。

初めて死に立ち会う出来事で、しかも本當に優しく住職との別れは大きな喪失感を残



晩年の祖母

絶対にはなれられない患者様の中に、祖母もいます。母と自分を深く愛し、支えてくれた祖母。認知症で介護を受けているなかで、肺炎を発症。病院の集中治療室の中で昏睡に近い状態となり、余命3か月の告知を受けました。そんな時、章子会長、道範代表は専門学校先生が言っていた「下腿内側を刺激すると良い」ということを思い出して、祖母の下腿内側を刺激し続けました。すると劇的に回復し、病院も退院。「家の畳の上で死にたい」という祖母ののぞみを叶えるため、自宅で介護を続けましたが、その祖母との永遠の別れを迎えることになりました。

のぞみ鍼灸整骨院の開院と 度重なる危機

事業は拡大し、2004(平成16)年、のぞみ鍼灸整骨院が開院しました。これがのぞみグループ第二期の大きな出来事となりました。「患者様の『のぞみ』を叶える」その想いをそのまま、整骨院の名称につけました。開院初日の来院者はわずかに4人。それでも、「患者様のさまざまな症状に向き合い、人の人生に寄り添う」という創業の想いを実現しようと道範代表やスタッフが懸命に取り組む中、次第に来院者は増えていき、1日に250人も来院される日もありました。同時にスタッフの数も増えて8、9人になりました。

研修会で出会った小川由智・現部長を、最初の出会ってから1年後によくスタッフの中心として迎えたのもこの頃です。「開業当初は患者様を増やすことに苦労しましたが、訪問治療で培った経験と、患者様一人ひとりに対する真摯な姿勢が少しずつ信頼へとつながっていききました。地域の方々に支えられ、多くの患者



のぞみ鍼灸整骨院開院前

様に来ていただけるようになりました」(道範代表)。全てが順風満帆に進んでいるように見えたこの頃、実は気づかぬうちに、創業時の理念が少しずつ抜け落ちて大切な何かを失い始めていたのです。道範代表は当時「今後の方向性について漠然とした不安を抱え、しんどさを感じていました」。

その予感を象徴するように、まさに経営危機ともいえる深刻な出来事が立て続けに起きます。一つは多忙化に伴うスタッフの相次ぐ退職。そして青天のへきれきともいえる出来事が起きました。

急激に患者数が増加したことに伴い、保険請求額が突出したことで厚生局のチェックが入りました。不正請求や水増し請求は一切行われていなかったものの、患者様への聞き取り調査とカルテへの記入内容の相違があり、レセプト(保険請求)の記入の不備が指摘されたのです。

「何のために、ここまで走っているのか。道範代表はこの指導を受けて、自分自身や事業自体に対する自信を無くしかけていました。のぞみは崩壊寸前の危機を迎えたのです」。



2007年大久保院開院時



開業初期の様子



「人や理念は育てるもの」 試練の中での思考の転換

そうした危機の渦中であって、道範代表は思いがけない出会いに恵まれ、重要なアドバイスを受ける幸運に恵まれました。そこで気づかされたことは、「のぞみ整骨院グループの事業の中に『人や理念を育てる経営』の視点が薄かった」ということ。「経営とは何か、人はなぜ働くのか。理念は掲げるものではなく、育てるものである。語り、試し、行動に落とし込むことがいかに重要か」ということでした。

また、厚生局による行政指導を受けたことについても、のぞみ整骨院グループが進化していく好機だと素直に受け止めることができました。

その後、国は政策的な流れとして全国的に柔道整復師業界への規制・監督を厳しくしてきました。この動きによって、整骨院の中には倒産したり閉業するところも現れました。しかしのぞみ整骨院グループは、この時の行政指導によりすでに問題を発見して改善・克服して保険請求を行っていたことで、事業経営的に大きなダメージを受けることはありませんでした。

グループはそれから、まさに「人や理念を育てる経営」グループとして、まっすぐに進み始めました。スタッフが中心となって、「治療家として、人々との縁を大切に、一人ひとりの望みをかなえるために取り組む」という理念を議論して「治療家甲子園」の出場に取り組みました。そして全国大会への進出を実現しました。2011年からは福島県のNPO「チームふくしま」の「福島ひまわり里親プロジェクト」の社会貢献活動へも参加しました。さらには思い切った新卒採用を実施するなど、困難な時期に



福島ひまわり里親プロジェクトへの参加



治療家甲子園での小川副院長＝当時。現在、部長（統括本部長）

も立ち止まることなく、前進していきました。

特に「治療家甲子園」での全国大会出場と新卒の採用は、組織としても大きな転機となりました。「治療家甲子園」は、覆面審査員が事前に出場者を訪れて技術や接客を採点。ブロック地域の予選を突破した治療家が全国大会へ進み、治療に対する姿勢や想いを大きな会場でプレゼンテーションして最優秀院を決めるという内容です。発表の中心となる小川副院長を中心にした準備の過程では、「なぜ治療家として働くのか」「何を実現したいのか」「患者様や仲間、地域や社会にどんな貢献ができるのか」を連日、議論しました。この準備の中で、のぞみグループの理念が研ぎ澄まされ、一人ひとりの中に深く息づくこととなりました。

新卒の採用は「今の現状を変えるのは無理です。新卒を採用し、組織全体を成長させていきたいと思います」というアドバイスを受けてのこと。自分自身のあり方を深く問う会話を続けた道範代表は現在地を把握し、組織の実態に直面して泣き崩れました。その姿を見た小川副院長は「僕が支えるので大丈夫です」と力強い言葉で応えました。グループ最大の危機を迎えている中で、新卒として採用・入社した3人は、この時期に力強い支えとなり、立て直しの先の成長へと大きく貢献してくれました。かけがえのない「人材」がグループの中で活躍を始め、新卒採用は大成功を収めたのです。

このほかにも、地元宇治市で開催する体操や健康、食育教室、福島、能登の災害チャリティ支援など、自治体や学校、NPO・NGO団体、市民グループとの活動を積極的に実施し、多様なつながりを広げています。道範代表は『関わる全ての人ののぞみを叶える』という理念の実現に向けて、私たちがつなぎ役となって治療家に限らずいろいろな方々と一緒に活動をしていきたい。それは『受胎から墓場まで（命の始ま



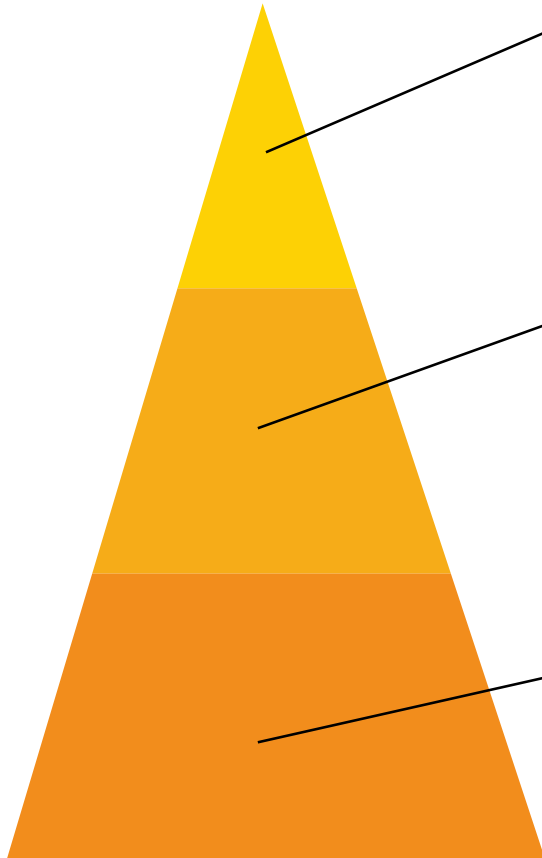
2011年 福島県避難所でのボランティアの様子

りから終わりまで関わり続ける治療院』のビジョンにつながり、今の会社のメンバーがいなくなった次の世代でも、この想いを受け継いで発展していったほしい」との願いを語ります。

2018年には「のぞみ感動物語コンテス」が開かれました。社員・スタッフ個人の中で蓄積されていた感動や大切な想い、体験を組織全体で共有。治療家としての意識の高まりを組織のなかで熟成させるような出来事になりました。

組織にとって絶対絶命ともいえるピンチの中で現れた小川副院長、そして新入社員の3人。それだけではなく、のぞみグループのために日々働いてくれている社員・スタッフ、治療院を必要としてくださっている患者様。多くの人たちに支えられながら、のぞみグループは危機を脱していったのです。

【組織における理念の位置づけ】



●上層：企業目標・計画・実行(具体的な行動)

ビジョンを達成するために、具体的な「企業目標」や「計画」が策定されます。これは、5年後、1年後といった期間で何を達成するのか、そのためにどのようなリソースが必要なのかといった具体的な数値を伴うものです。そして、最終的にその目標や計画を「実行」に移すことが最も重要です。日々の活動において、例えば「今日は患者様に必ず『ありがとう』と言ってもらう」といった具体的な行動目標にまで落とし込むことで、理念は単なる理想論ではなく、日々の実践に結びつく生きた指針となります。

●中層：ビジョン(先の見通し)

経営理念を実現するために、組織が将来どのような姿を目指すのかを示すのが「ビジョン」です。ビジョンは、具体的な目標設定や戦略立案の方向性を明確に示す羅針盤の役割を果たします。例えば、グラフィックレコーディング(グラレコ)を用いて理念やビジョンを絵で表現することで、抽象的な概念を分かりやすく可視化し、組織全体で共有しやすくなります。道範代表が2~3時間かけて語った内容を、プロのイラストレーターがA4用紙1枚に集約したグラレコは、理念やビジョンを具体的に表現する非常に優れた例と言えるでしょう。視覚に訴えることで、より深い理解と共感を促します。

●土台：経営理念・方針(会社の存在理由)

組織の最も根幹に位置するのが、会社の存在理由を明確に示す「経営理念」や「方針」です。これは、組織が何のために存在するのか、どのような価値を社会に提供するのかという根本的な問いに対する揺るぎない答えであり、組織全体のあらゆる活動の強固な土台となります。この土台がしっかりしていなければ、その上に築かれるものは全て不安定なものになってしまいます。



この理念は、これまでにならざるに難から逃げることなく取り組み、最善策を見出してきた体験がグループ全体で共有され、「目の前の患者様の『のぞみ』を誠実に叶えていく」という組織のミッションとして一人ひとりのスタッフの姿勢につながり、のぞみグループを支えています。

この理念の発表にあたり、道範代表はこう語りました。「この『ビフミッド』構造は、理念から具体的な行動までの一貫性を鮮やかに示しています。土台である理念から頂点である実行・実践までが一貫していることで、組織は長期的な繁栄を築き上げることが出来ます。同時に、こうした理念に行動が伴っているか、言行一致の難しさと重要性についても、こう述べています。「この一貫性を保つことは、言うほど容易なことではありません」と。

社員やスタッフ、地域の方々へ理念を説明する時に道範代表は、失敗も含めた経験、そこで得た反省や学び、そして周囲の人々への感謝や感動の気持ちとともに、母・章子会長と自分自身の人生の出来事を率直に語ります。「理念が単なる言葉ではなく、人生や経験、そして行動に深く根差したものであることを感じ取っていただきたい」という想いがあるからです。

経営計画発表会での集合写真





令和6年能登半島地震被災地支援活動

2024年に始まった第三期と、迎えた35周年は、脳梗塞リハビリ事業、MamaClub、保育士スタッフの参画、福島や能登半島の被災地でのチャリティ活動、行政と連携して子どもや保護者への食育・健康講座の開催など、治療院の枠を超えて社会に必要とされるグループ企業として、さらに多くの人々の人生を支える場へと進化しています。これまでのぞみの歩みは、成功を追い求めるのではなく、人々の痛みに寄り添い、人生や社会に誠実であることを追求し続けた35年でした。その経験と年月、思いの結晶として築かれた理念は、これからも、のぞみグループが未来へ手渡す約束として存在し続けるのです。



1 出張講座 2 能登でのチャリティマッサージの様子 3 出張講座 4 道範代表 5 令和6年能登半島地震被災地支援活動

採用と共育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujo

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR（社会貢献活動）を活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。



YELL

Vol. 32

2026年5月30日

発行：採用と共育研究所

〒960-8055

福島県福島市野田町 6-7-8

電話 024-529-5153

info@saiyoutokyouiku.com

